

Title	テンソル積上の作用素のApproximate Eigenvaluesについて (Approximation Theory in Functional Analysis)
Author(s)	一瀬, 孝
Citation	数理解析研究所講究録 (1976), 265: 67-75
Issue Date	1976-02
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/105848">http://hdl.handle.net/2433/105848</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

# テンソル積上の作用素の

## approximate eigenvalues について

北大 理 一瀬 孝

§ 0. 序.  $X, Y$  を Banach 空間.  $X \otimes Y$  をこれらのテンソル積,  $X \otimes Y$  をある crossnorm  $\alpha$  に関する, その完備化とする.  $X, Y$  上の恒等作用素を同じ  $I$  で表わし,  $X \otimes Y$  上のそれを  $\mathbb{I} (= I \otimes I)$  で表わす.

$A, B$  を, それぞれ,  $X, Y$  で稠密に定義された線型作用素とする. 多項式  $P(\xi, \eta) = \sum c_{jk} \xi^j \eta^k$  (of degrees  $m$  in  $\xi$  and  $n$  in  $\eta$ ) に対して,  $X \otimes Y$  上の線型作用素

$$P\{A \otimes I, I \otimes B\} \equiv \sum c_{jk} A^j \otimes B^k, \quad \text{定義域} = D[A^m] \otimes D[B^n],$$

を考えよう. 簡単の為に,  $P\{A \otimes I, I \otimes B\}$  は,  $X \otimes Y$  で closable であるとし, その closure を  $P$  で表わす.

$\lambda$  が  $P$  の eigenvalue のとき,  $\lambda$  に対する eigenvector とし,  $\lambda$  が isolated finite-dimensional eigenvalue である場合を除いて ([1]), 必ずしも  $v = x \otimes y$  ( $x \in D[A^m], y \in D[B^n]$ )

の形のものがあるとは限らない。

それでは、 $\lambda$  が  $P$  の approximate eigenvalue のときには、対応する事情はどうか。この問題に答えの「が」、このノート  
の主な目的である。ここで、 $\lambda$  が、Banach 空間  $Z$  上の線型  
作用素  $T: D[T] \subset Z \rightarrow Z$  の approximate eigenvalue で  
あるとは、ある列  $\{z_\ell\}_{\ell=1}^\infty \subset D[T]$ ,  $\|z_\ell\|=1$ ,  $\ell=1,2,\dots$ , が存在  
して、 $(T-\lambda I)z_\ell \rightarrow 0$  ( $\ell \rightarrow \infty$ ) が成立するときを云う。  $T$  の  
approximate eigenvalues の全体を  $\sigma_\pi(T)$  で表わし、  $T$  の  
approximate point spectrum と呼ぶ。

上の問題は、 $P$  の approximate eigenvalue に関して、  
次の如くなる：

$\lambda \in \sigma_\pi(P)$  のとき、ある列  $\{x_\ell\}_{\ell=1}^\infty \subset D[A^m]$ ,  $\{y_\ell\}_{\ell=1}^\infty \subset D[B^n]$ ,  
 $\|x_\ell\|=\|y_\ell\|=1$ ,  $\ell=1,2,\dots$ , が存在して、 $(P-\lambda I)(x_\ell \otimes y_\ell) \rightarrow 0$  ( $\ell \rightarrow \infty$ )  
が成立するか。

この問題のあおぎ、ける答は、 $\lambda$  がある条件を満してあれ  
ば、(あるクラスの多項式  $P(z, \eta)$  に対して) Yes であるが、  
さもなければ、一般には No である。

簡単の為に、多項式  $P(z, \eta) = z + \eta$  に対応する作用素  
 $A \otimes I + I \otimes B$  に限定して話を進めよう。

## § 1. 結果.

先ず記号の説明, 定義から始めよう.

Banach 空間  $Z$  で定義された, すべての線型有界作用素  $S: D[S] \subset Z \rightarrow Z$  (定義域は任意) の集合を  $B(Z)$  で表わし, このうち  $D[S] = Z$  なる, すべての  $S$  の集合を  $L(Z)$  で表わす.

$X \otimes Y$  上の norm  $\alpha$  が,

$\|x \otimes y\|_\alpha = \|x\| \|y\|, \forall (x, y) \in X \times Y; \|x' \otimes y'\|_\alpha = \|x'\| \|y'\|, \forall (x', y') \in X' \times Y'$ ,  
を満しているとき, reasonable であると云う. reasonable norm  $\alpha$  が, quasi-uniform (with constant  $k$ ) であると云う,

$$(1.1) \quad \begin{aligned} &\|(T \otimes S)u\|_\alpha \leq k \|T\| \|S\| \|u\|_\alpha, \\ &\forall (T, S) \in L(X) \times L(Y), \forall u \in X \otimes Y, \end{aligned}$$

が成立するときを云う.  $k$  は,  $T, S, u$  に無関係な定数.

更に,  $\alpha$  が, strongly quasi-uniform であると云う,  $\alpha$  が quasi-uniform であつて, しかも, (1.1) が

$$\forall (T, S) \in B(X) \times B(Y), \forall u \in D[T] \otimes D[S]$$

に於いて成立するときを云う.

norm  $\varepsilon (= \lambda)$  は, strongly quasi-uniform ( $k=1$ ) である.

より一般に, Grothendieck の意味の injective  $\otimes$ -norms も又, そうである ( $k=1$ ). 又,  $X, Y$  が共に Hilbert 空間のとき, norm  $\pi (= \gamma)$  及び prehilbertian norm  $\sigma$  は, strongly quasi-uniform になる ( $k=1$ ).

$T$  を Banach 空間  $Z$  で稠密に定義された線型閉作用素とするとき,  $T$  の spectrum, resolvent set, approximate point spectrum を, それぞれ,  $\sigma(T)$ ,  $\rho(T)$ ,  $\sigma_{\pi}(T)$  で表わす.

$T$  がある  $0 \leq \theta_T < \pi$  に對して, 条件:

$$\rho(T) \supset C S(\theta_T), \quad S(\theta_T) = \{\lambda; |\arg \lambda| \leq \theta_T\},$$

$$\|\lambda(\lambda I - T)^{-1}\| \leq M_T(\theta), \quad \theta = \arg \lambda, \quad \forall \lambda \notin S(\theta_T)$$

を満してゐるとき,  $(\theta_T, M_T(\theta))$ -型であると云ふ.

得られた主結果は, 次の定理である.

Theorem 1.  $\alpha$  を  $X \otimes Y$  上の strongly quasi-uniform reasonable norm とする.  $A, B$  が それぞれ  $(\theta_A, M_A(\theta))$ -,  $(\theta_B, M_B(\theta))$ -型であつて, 且  $0 \leq \theta_A + \theta_B < \pi$  を満してゐるとする. そのとき,

$$\sigma_{\pi}((A \otimes I + I \otimes B)^{\sim}) = \sigma_{\pi}(A) + \sigma_{\pi}(B).$$

(簡単な爲に,  $A \otimes I + I \otimes B$  は,  $X \otimes Y$  で closable であるとし, 従つて,  $(A \otimes I + I \otimes B)^{\sim}$  は その closure を表わす.)

Theorem 1 の証明に必要な二つの定理を挙げておこう.

先づ記号の説明から. 稠密に定義された線型閉作用素  $T: D[T] \subset Z \rightarrow Z$  の extended spectrum, extended approximate point spectrum を  $\sigma_e(T)$ ,  $\sigma_{\pi e}(T)$  で表わす:

$$\sigma_e(T) = \begin{cases} \sigma(T) \cup \{\infty\}, & T \text{ が非有界のとき} \\ \sigma(T), & T \text{ が有界のとき} \end{cases}$$

$$\sigma_{\pi e}(T) = \begin{cases} \sigma_{\pi}(T) \cup \{\infty\}, & T \text{ が非有界のとき} \\ \sigma_{\pi}(T), & T \text{ が有界のとき} \end{cases}$$

$\sigma_e(T)$  は Riemann 球  $\mathbb{C}^* = \mathbb{C} \cup \{\infty\}$  の空でない compact 部分集合であり,  $\sigma_{\pi e}(T)$  は,  $\sigma_e(T)$  の compact 部分集合である.

さて,  $A, B$  をそれぞれ  $X, Y$  で稠密に定義された線型作用素とし,  $\rho(A) \neq \emptyset, \rho(B) \neq \emptyset$  とする.  $\mathcal{F}_{\infty}(A, B)$  を  $\sigma_e(A) \times \sigma_e(B) \subset \mathbb{C}^{*2}$  の近傍で正則な関数全体とする.  $f \in \mathcal{F}_{\infty}(A, B)$  に対して,  $X \hat{\otimes} Y$  上の線型有界作用素

$$\begin{aligned} (1.2) \quad f(A \otimes I, I \otimes B) &\equiv f(\infty, \infty) I \hat{\otimes} I + (2\pi i)^{-1} I \hat{\otimes} \left( \int_{\partial V} f(\infty, \zeta_2) (\zeta_2 I - B)^{-1} d\zeta_2 \right) \\ &+ (2\pi i)^{-1} \left( \int_{\partial U} f(\zeta_1, \infty) (\zeta_1 I - A)^{-1} d\zeta_1 \right) \hat{\otimes} I \\ &+ (2\pi i)^{-2} \int_{\partial U} \int_{\partial V} f(\zeta_1, \zeta_2) (\zeta_1 I - A)^{-1} \hat{\otimes} (\zeta_2 I - B)^{-1} d\zeta_1 d\zeta_2 \end{aligned}$$

を考えよう. ここに,  $U, V$  は,  $\mathbb{C}^*$  の開集合で, その境界  $\partial U, \partial V$  は, 有限本の rectifiable Jordan curves からなり,  $f(\zeta_1, \zeta_2)$  は,  $\overline{U} \times \overline{V} \subset \mathbb{C}^{*2}$  で正則となっているものである. 但し,  $A$  が有界のとき,  $f(\infty, \zeta_2) \equiv 0$ ,  $B$  が有界のとき,  $f(\zeta_1, \infty) \equiv 0$  と約束する. (1.2) の右辺は,  $U, V$  の選ぶ方には依らない.

Theorem 2.  $\alpha$  を  $X \otimes Y$  上の strongly quasi-uniform reasonable norm とする. そのとき  $f \in \mathcal{F}_\alpha(A, B)$  に対して,  

$$\sigma_\pi(f(A \otimes I, I \otimes B)) = f(\sigma_\pi(A), \sigma_\pi(B)).$$

Remarks. 1. Theorem 1 の下での  $A, B$  に対して,  $P(\frac{1}{3}, \eta) = \frac{1}{3} + \eta$  は, 一般には,  $\mathcal{F}_\alpha(A, B)$  に属していない.

2. Theorem 1 は, §0. で提起した問題の答えを与えている. 即ち,  $\lambda \in \sigma_\pi((A \otimes I + I \otimes B)^\sim)$  ならば, ある列  $\{x_l\}_{l=1}^\infty \subset D[A]$ ,  $\{y_l\}_{l=1}^\infty \subset D[B]$ ,  $\|x_l\| = \|y_l\| = 1$ ,  $l=1, 2, \dots$ , が存在して,

$$[(A \otimes I + I \otimes B)^\sim - \lambda I \otimes I](x_l \otimes y_l) \rightarrow 0 \quad (l \rightarrow \infty)$$

が成立する. 更に Theorem 1 は, 次のことをも主張している:

ある  $\mu, \nu \in \mathbb{C}$  が存在して,  $\mu + \nu = \lambda$  であって

$$(A - \mu I)x_l \rightarrow 0, \quad (B - \nu I)y_l \rightarrow 0 \quad (l \rightarrow \infty).$$

3.  $\alpha$  が "quasi-uniform" であるか, "strongly quasi-uniform" ではないとき, Theorems 1 & 2 は必ずしも成立しない.

Example. 適当に Banach 空間  $X, Y$  及び isomorphism  $A: X \rightarrow X$  を取って,  $A \hat{\otimes}_\pi I$  が  $X \hat{\otimes}_\pi Y$  上の線型有界作用素とに閉値域を持たないようにできる. このとき,  $\pi$  は, quasi-uniform ( $k=1$ ) であるか, strongly quasi-uniform ではない. 従って,  $0 \in \sigma_\pi(A \hat{\otimes}_\pi I)$  であるか,  $0 \notin \sigma_\pi(A) = \sigma_\pi(A) \cdot \sigma(I)$  である.

## § 2. 証明の概略

Proof of Theorem 2. "左辺  $\supset$  右辺" の証明は 容易.

逆の inclusion の証明は, 次の 2つの lemmas を用いて行ふ.  
特に, Stodkowski-Zelasko [2] による Lemma 1 が本質的役割を果たす.

Lemma 1.  $\{T_1, \dots, T_{p+q}\} \subset L(Z)$  であって,  $z$  は commute するとする. もし

$$\inf \left\{ \sum_{j=1}^p \|T_j z\| ; z \in Z, \|z\|=1 \right\} = 0$$

ならば, ある  $(\lambda_1, \dots, \lambda_q) \in \mathbb{C}^q$  が存在して

$$\inf \left\{ \sum_{j=1}^p \|T_j z\| + \sum_{k=1}^q \|(T_{p+k} - \lambda_k I) z\| ; z \in Z, \|z\|=1 \right\} = 0$$

が成立する.

Lemma 2.  $\alpha$  が  $X \otimes Y$  上の strongly quasi-uniform reasonable norm とする. そのとき, 任意の  $X$  で稠密に定義された線型閉作用素  $A$  に対して,

$$\sigma_\pi(A \hat{\otimes} I) = \sigma_\pi(A).$$

Proof of Theorem 1. 同様に "左辺  $\supset$  右辺" の証明は 容易. 逆の inclusion を示せばよい.  $P = (A \otimes I + I \otimes B)^\sim$



とおく.  $\lambda_0 \notin \sigma(A) + \sigma(B)$  を 1 つとて固定する. 定理の条件の下で,  $\sigma(A) + \sigma(B) = \sigma(P)$  が成立するから,  $(P - \lambda_0 I)^{-1}$  が存在して,  $L(X \otimes Y)$  に属し, それは,

$$(P - \lambda_0 I)^{-1} = (2\pi i)^{-2} \int_{\Gamma_A} \int_{\Gamma_B} (z_1 + z_2 - \lambda_0)^{-1} (z_1 I - A)^{-1} \otimes (z_2 I - B)^{-1} dz_1 dz_2$$

で与えられる.  $\Gamma_A, \Gamma_B$  は,  $A, B$  が  $(\theta_A, M_A(\theta))$ -,  $(\theta_B, M_B(\theta))$ -型で,  $0 \leq \theta_A + \theta_B < \pi$  であることを考慮して,  $\rho(A), \rho(B)$  の中で適当に取, た arcs である. . . このとき,

$$(\xi + \eta - \lambda_0)^{-1} = (2\pi i)^{-2} \int_{\Gamma_A} \int_{\Gamma_B} (z_1 + z_2 - \lambda_0)^{-1} (z_1 - \xi)^{-1} (z_2 - \eta)^{-1} dz_1 dz_2$$

だから, (本義) Riemann 積分の定義から, Riemann sums の列  $\{f_n(\xi, \eta)\}_{n=1}^{\infty} \subset \mathcal{F}_{\infty}(A, B)$  が存在して

$$\lim_{n \rightarrow \infty} f_n(\xi, \eta) = (\xi + \eta - \lambda_0)^{-1}, \text{ pointwise on } \sigma_e(A) \times \sigma_e(B).$$

1 かつ,

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \|f_n(A \otimes I, I \otimes B) - (P - \lambda_0 I)^{-1}\| = 0.$$

(但し,  $\infty \in \sigma_e(A)$  のとき,  $(\infty + \eta - \lambda_0)^{-1} = 0$ ,  $\forall \eta \in \sigma_e(B)$ , 及び  $\infty \in \sigma_e(B)$  のとき,  $(\xi + \infty - \lambda_0)^{-1} = 0$ ,  $\forall \xi \in \sigma_e(A)$  と約束する.)

よって, Theorem 2 及び 次の 2 つの lemmas を用いて,

$$\sigma_{\pi}((P - \lambda_0 I)^{-1}) = \{(\mu + \nu - \lambda_0)^{-1}; \mu \in \sigma_e(A), \nu \in \sigma_e(B)\}$$

を証明することにできる. これより, Theorem 1 を得る.

証明の中で, Lemma 3 が本質的な役割を果たす.

Lemma 3. 上の  $\{f_n\}_{n=1}^{\infty}$  は,  $(\frac{1}{3} + \eta - \lambda_c)^{-1} = \sigma_e(A) \times \sigma_e(B)$  上で一様収束する.

Lemma 4.  $T \in L(Z)$ ,  $\{T_n\}_{n=1}^{\infty} \subset L(Z)$  であって  $\lim_{n \rightarrow \infty} \|T_n - T\| = 0$  とする.

a)  $\lambda_n \in \sigma_{\pi}(T_n)$ ,  $n=1, 2, \dots$ ,  $\lambda = \lim_{n \rightarrow \infty} \lambda_n$  ならば,  $\lambda \in \sigma_{\pi}(T)$ .

b)  $T, T_n$ ,  $n=1, 2, \dots$ , は互に commute するとする.

そのとき, 各  $\lambda \in \sigma_{\pi}(T)$  に対して, ある列  $\{\lambda_n\}_{n=1}^{\infty}$ ,  $\lambda_n \in \sigma_{\pi}(T_n)$ ,  $n=1, 2, \dots$ , が存在して,  $\lim_{n \rightarrow \infty} \lambda_n = \lambda$ .

#### References

- [1] 筆者: Essential spectra for tensor products of linear operators,  $\infty$ 次元空間のテンソル積, 数理研講究録 228(1975年3月).

及び

筆者: On the spectral properties of tensor products of linear operators, スペクトル理論・散乱理論とその周辺, 数理研講究録 242(1975年6月).

- [2] Słodkowski-Zelasko: On joint spectra of commuting families of operators, *Studia Math.* 50(1974), 127-148.